

『日韓キリスト教関係史資料』 全3巻完結にあたって

東アジアキリスト教交流史研究会
2021年3月20日

井田 泉

新教出版社・新刊案内 2020年11月25日発売

日韓キリスト教関係史資料 Ⅲ

1945-2010

記憶を未来へ

富坂キリスト教センター編

527点

A 5判・上製・総 1,115 頁・本体 15,000 円（税込定価 16,500 円） ISBN 978-4-400-41224-3 C1016

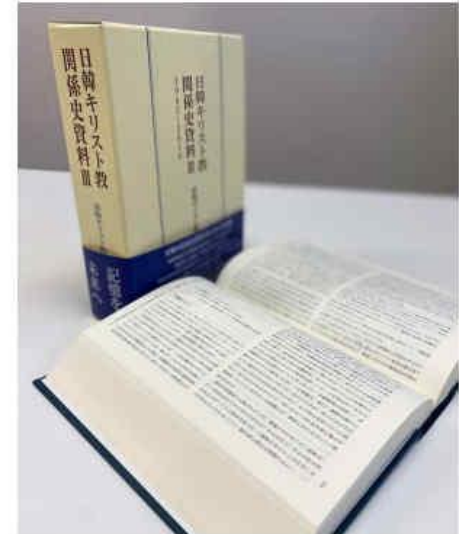
日韓の貴重な資料 500 点以上を収録。アジア太平洋戦争における日本の敗戦から日韓基本条約締結までの交流を第Ⅰ部、韓国民主化闘争と日韓連帯の動きを第Ⅱ部、そして戦後補償問題を含む日韓の交わりと統一への模索を第Ⅲ部とする。とりわけ、韓国民主化運動における日韓の資料については他の追隨を許さぬ充実した内容。

今後日韓関係を論じる上で欠くことのできない基本資料集がついに成る。

既刊

日韓キリスト教関係史資料Ⅰ 1878-1922 現在品切中

日韓キリスト教関係史資料Ⅱ 1923-1945 A 5判・850 頁・本体 14,000 円



日韓キリスト教
関係史資料Ⅲ

富坂キリスト教センター編

新教出版社

日韓キリスト教
関係史資料Ⅱ

富坂キリスト教センター編

新教出版社

日韓キリスト教関係史資料

1976—1982

新教出版社

日韓キリスト教
関係史資料Ⅲ
1945—2010

富坂キリスト教センター編

新教出版社

日韓キリスト教
関係史資料Ⅱ
1923—1945

富坂キリスト教センター編

新教出版社

日韓キリスト教
関係史資料
1876—1922

小川圭治
池明観編

新教出版社

刊行の言葉

私たちが、既刊の『日韓キリスト教関係史資料』ⅠとⅡに続く最後のまとめとなるⅢを発行する企画を立て、富坂キリスト教センターの承認を受けたのは二〇〇七年である。それから一三年、今ここによりよく刊行の運びとなった。

今回、これだけの時間と労力をかけながらも発刊を願った理由がある。それは、一九七〇年代から始まる韓国民主化闘争をめぐる日韓キリスト者の連帯の証言を得ることが、時の経過とともに困難になりつつあるからである。

改めて指摘するまでもなく、本書に収録された資料の多さからも明らかなように、一九四五年以降の日韓キリスト教関係史において、韓国民主化闘争の時代ほど両国教会の交わりが深く豊かになった時代はない。それは、聖書の御言葉である「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ」（コリント人への第一の手紙一二章二六節、一九五五年改訳）を、そのままに生きた両国キリスト者の関係であったと言えるよう。さらに言葉を添えれば、足かけ三六年にわたる朝鮮植民地支配によって信頼を失った私たちが、闘いに立ち上がった韓国の人々との間で、少しずつ新たな関わりを築き直すことが許された時であったとも言えるだろう。

一九七三年に発表された「一九七三年韓国キリスト者宣言」は、一九七六年の「民主救国宣言」と共に、前者は自由と民主主義の持つ価値を神学的に、後者は政治的に理論化した宣言として双璧をなす。そして、このような宣言に生きた民衆の力によって、韓国では軍事独裁政権が倒され、自由と民主主義が勝利したの

である。

一方、朝鮮半島の統一への困難さは、紆余曲折を経ながら、混迷を深めているように思える。しかし、南北の分断の責任が日本の朝鮮植民地統治に起因する以上、私たちはその責を免れることはできない。それでは、いかにしてこの困難な課題に向き合うことができるのか。

私たちにとっての道は一つである。南北それぞれの民衆から私たちがいかに信頼される者となるかにかかっている。大韓民国の民衆から、朝鮮民主主義人民共和国の民衆から、私たちがどれだけ朝鮮植民地統治への真摯な反省と謝罪のもとに、朝鮮半島の平和と統一への願いを共にする歩みを創り出せるのか、そのことが問われている。そしてこの課題への取り組みは、私たちの足元の問題として生起している在日の人々への差別と偏見、排外主義に対する戦いを自らの戦いとすることを求めている。本書に収録された資料は、そのことを示唆している。それは同時に、二一世紀における日韓民衆の進むべき道と負うべき課題を提示する。

日韓キリスト教関係史資料を完結するにあたり、忌憚ないご批判を期待する。
そして、ここに至るまでの道筋を守り導かれた神に、心からの感謝を捧げる。

二〇二〇年三月一日

富坂キリスト教センター「日韓キリスト教関係史研究会」

座長 東海林 勤

まえがき

「特に注目すべきことは一九七〇年代以降、韓国教会が民主化運動を展開し、苦難の中にあつたとき、日韓両国の教会の間に連帯が芽ばえたことである。これは今後の東アジアの教会史にとって大きな意味を持つのではなからうか。いつか、戦後生まれの日韓キリスト教関係史の資料を編纂する課題にも取り組まねばなるまい。」(池明観、一九九五年六月一〇日)

池明観先生が、『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』に「いつか」と書かれてから二五年、最初の『日韓キリスト教関係史資料』が刊行されてから三六年を経て、ここようやく『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ』を上梓する運びとなった。この三巻によって一八七六年から二〇一〇年までの一三四年にわたる日韓のキリスト教関係史が資料によって明らかにになる。

明治以降の近代日本にとって、アジア太平洋戦争の敗戦は、「脱亜入欧」を掲げて近代化を急ぎ、「皇国の統帥と独立」を喫緊の課題としたそれまでの歩みを反省し、今一度新たな国造りを行う出発点となるはずであった。その際の最重要課題は、中国・朝鮮・台湾・東南アジア等に対して負わせた傷跡を、敗戦後の歩みの中でいかに償っていくかにあった。侵略された当の国だけではない、諸外国もまた、そのために日本が何をするのかを見つめていた。犯した過ちを真に悔い、誠意ある謝罪と補償を内外に示してこそ、日本が再び国際社会に復帰できる唯一の手掛かりであつたからである。

しかし、与えられた最大の機会を、わたしたちは生かすことができなかった。それどころか、アジア諸国

に対する信頼回復の意味を持ち得た平和憲法を、歴代自民党政権は改変し、日本を再び戦争のできる国にしたのである。

しかし、ここに収録された資料の一つひとつは、二一世紀の日本の進むべき針路を示唆して余りある。隣国との近くて遠い関わりが、一九六七年の日本基督教団議長名による「戦争責任告白」を経て、七〇年代における日本のキリスト者の在日朝鮮人・韓国人問題との取り組みや韓国民主化闘争支援によって、日韓交流史上かつてない深く豊かな信頼と交わりの実を結ぶに至った経緯が明らかにされているからである。そしてそれは、日韓関係に止まらず、全ての国々との関係を築く際の道標となる。

本書は、以上述べた問題意識のもとに、敗戦から二〇一〇年の韓国併合一〇〇年に至る六五年の日韓キリスト教関係史をⅠ・Ⅲに区分して資料を整理した。Ⅰは、アジア太平洋戦争敗戦から日韓基本条約締結までの交流の動きで、年代は一九四五年から一九六五年である。Ⅱは、韓国民主化闘争と日韓連帯の動きで、年代は一九六五年から一九八七年である。Ⅲは、戦後補償問題を含む日韓の交わりと統一への模索で、年代は一九八七年から二〇一〇年である。

既刊の資料集Ⅰ・Ⅱで取り扱った資料は合わせて六九年間のものではあったが、本書だけで六五年間に及ぶ収集した資料の全てを網羅するなら一〇〇頁をはるかに超える膨大なものとなるが、それらを取捨選択して一〇〇頁にまで精選した。紙数の関係で掲載できなかった資料でも重要と思われるものについては、可能な限り解説で触れている。なお、口絵写真の多くはパウ・シユナイス氏の労に負っている。

慰安婦問題や徴用工問題等をめぐり日韓関係が困難な状況を迎えている今だからこそ、本書を上梓する意味は大きい。これらの資料によって、日韓の歴史を踏まえた日本の責任と役割を改めて自覚することができるからである。

二〇二〇年八月十五日

富坂キリスト教センター「日韓キリスト教関係史研究会」

座長代理 飯島 信

*

今、わたしの胸には「ニム（あなた）のための行進曲」の歌が鳴り響いている。

歳月は流れゆきても 山河は知っている／目覚めて叫ぶ熱い喊声／先に行くから 生きている者は続け
この歌は一九八〇年五月の光州事件（五・一八光州民主化運動あるいは光州民衆抗争とも呼ばれる）の記憶と一体となって歌い継がれてきた。光州事件は韓国の民主化運動の象徴的事件であり、その後に大きな影響を与えてきた。この資料集が扱う時代範囲のほぼ半ばに起こった出来事である。歴史は今を揺り動かす——そんな言葉が浮かぶ。

ようやく『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ』が刊行の運びとなった。これは一九九五年に発行された『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』の続編である。長い準備期間を経て、これの編集・刊行を目的とする「日韓キリスト教関係史研究会」が正式に発足したのは二〇〇七年であった。座長は東海林勤、当初メンバーは飯島信、

ここでどうしても触れなければならぬのは、同志社大学名誉教授・土肥昭夫先生のことである。先生は早くからこのような資料集の必要を早くから訴えられ、編集方針と詳細な目次案まで提示しておられた（『現代日韓キリスト教関係史資料集の構想を考える』『思想の杜——日本プロテスタント・キリスト教史より』新教出版社、二〇〇六、所収）。先生の情熱と働きかけがあったからこそ、この資料集の編集が開始されたと言ってしまうのではない。ところが先生は二〇〇八年三月三十一日、ご自宅で急逝された。それから一二年もかかってしまったことをお詫びしたい。

精一杯の努力はしたもの、さまざまな不十分なところを抱えていることはわたしたち自身が感じている。しかしこれ以上引き延ばすことは許されない。放置すれば、厳しい時代を生きまた死んだ人びとの思いや苦闘は彼方に消え去ってしまうであろう。どうかこの資料集を紐解かれる方々が日韓のキリスト教の歴史のさまざまな面に触れて、今とこれからあるべき日韓関係に思いを巡らせていただければと願う。

最後になったが、研究会発足前から種々のご配慮ご支援をいただいた富坂キリスト教センター元総主事の鈴木正三牧師、ここまでの遅延を忍耐強く見守り、ご協力を惜しまれなかった同センターの岡田仁総主事、新教出版社の小林望社長に心から感謝するものである。

二〇二〇年八月十五日

富坂キリスト教センター「日韓キリスト教関係史研究会」

主事 井田 泉

追記 八月二五日、座長の東海林勤先生が八八年の生涯を閉じて天に帰られた。永遠の平和のうちに憩われることを祈ります。

凡 例

- 5 原資料の誤字、誤植、脱字は、そのままでは理解不可能なものに限って部分的に改めたが、原則として「ママ」とルビを付して原文の通りにした。
- 6 原資料に差別語や不快語など不適切な用語が含まれているが、初出の状態を生かす方針から「ママ」とルビを付して原文の通りとした。
- 7 括弧類は以下のように使い分ける。
 () と [] は原資料のもの
 「」 は編者によるもの

編者

公益財団法人 基督教イーストエイジャミッション

富坂キリスト教センター

〒 112-0002 東京都文京区小石川 2-9-4

電話：03-3812-3852

<http://www.tomisaka.jp/>

日韓キリスト教関係史資料Ⅲ

1945-2010

2020 年 11 月 30 日 第 1 版第 1 刷発行

編 者……富坂キリスト教センター

発行者……小林 望

発行所……株式会社新教出版社

〒 162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1

電話（代表）03 (3260) 6148

振替 00180-1-9991

印刷・製本……モリモト印刷株式会社

ISBN 978-4-400-41224-3 C1016

2020 ©

	第Ⅰ巻 1984年刊	第Ⅱ巻 1995年刊	第Ⅲ巻 2020年刊	計
扱う年代	1876～1922	1923～1945	1945～2010	135年
主なテーマ	初期交流 日本教会の朝鮮伝道 朝鮮統治問題と日本の教会 日韓併合 105人事件 三・一独立運動 （日本語資料のみ）	関東大震災 「文化政治」 神社参拝問題 皇民化政策と戦争協力 植民地支配末期の弾圧	アジア太平洋戦争敗戦から 日韓基本条約まで 韓国民主化闘争と日韓連帯 戦後補償問題を含む日韓の 交わりと統一への模索	
頁数（約）	580頁	880頁	1100頁	2560頁

最初の資料『七一雑報』 1876.4.21

※神戸で発行された日本のキリスト教界最初の週刊紙

「投書」 在東京青森県平民 手塚 新

謹んで辦理正副大臣の和親条約成て帰朝し玉ふを祝賀し奉り並せて兄弟姉妹に勧め奉るの文

姉妹よ歡歌せよ兄弟よ踏舞せよ宜しく中心〔まごころ〕より出たる感恩の馨香〔けいこう〕をエホバ(真神〔まことのかみ〕の尊称)の壇前に捧げ以て祝謝の祭を作〔なす〕べし

抑[そもそも]日韓久しく葛藤を生じて……（政府）遂に断然問罪遣韓使の令を発し続て使鑑〔しかん〕錨を抜〔ぬき〕黒煙天を焦〔こが〕して行く而して爾後政府更に大に軍備を為して……

嗚呼我輩をして此の如く歡欣雀躍手の舞足の踏むを覚えざらしむるはこれ偏へに我皇帝陛下の威徳と弁理正副大臣の宏智とに出ると雖ども余独り最もこれを天地を造化し万有を管理し玉ふ全能の神エホバの恩佑に出でしと云はざるを得す而して余又最も栄光讚美を以てエホバの壇前に歸し全心以てその鴻恩に感謝せざるを得ず

第Ⅰ巻の最後

三・一運動（1919）に対する3人の日本人の反応

（1） 冨永徳磨（元日本基督教会牧師。後、独立）

水原事件〔堤岩里〕は却つて結果であり偶発事である。……他の力のために誘発されたものである。其は即ち朝鮮人一部の独立運動である。

総督府の政治については鮮民〔ママ〕は感謝している筈である。

日本人も甚だ悪い。……けれども鮮人〔ママ〕と来たら一層品性が劣等である。

朝鮮を救ふためには、どうしても基督教の真生命を鮮民に流し入れて彼等を神の子供にせねばならぬ。

(2) 柏木義円（日本組合教会安中教会牧師）

「朝鮮人虐殺の実況」 何たる大無道の蛮行ぞ。

「朝鮮事件と鮮人「ママ」基督者」

氏「渡瀬常吉＝組合教会朝鮮伝道主任」は、人道上決して看過す可らざる大問題たる虐殺事件に関しては全く沈黙被致候。今回騒擾の真因と目さるる官憲や邦人の態度には殆んど触れ居られざるは、吾人の顔る解し兼ねる所に有之候。兎に角氏の誇りは組合教会鮮人二万の信者が少しも動なかつたと申す所に有之様に有相見へ、総督府も今更氏の伝道の効果に随喜することと存候。

(3) 内村鑑三（無教会）

わが国人が朝鮮でした事を、心から申わけなく思っています。もつともアメリカ人が問題にしている残虐事件の大部分は、つまらぬ捏造に過ぎないと、わたしは確く信じています。

第Ⅱ巻 1923～1945

ここでは神社参拝問題関連のみ一部を紹介する。

1910 韓国併合

1919 三・一運動

同年 ソウル(当時、京城)に朝鮮神社創立（祭神＝天照大神、明治天皇）

1925 朝鮮神宮建立（改称）

1935 平安南道知事、中等学校長会で神社参拝を指示

1936 崇実中学ほか、神社参拝を拒否（廃校に至る）

1938.9.10 長老教会総会、神社参拝を決議

1939 朱基徹牧師（平壤 山亭峴教会）「五つのわたしの祈願」説教

1944 朱基徹牧師ら獄死

「神社参拝問題解決——功劳警察官表彰 平南道警察部で」

毎日新報 [朝鮮総督府の機関紙] 昭13(1938)年10月2日

【平壤】長老教系統キリスト教会が、先月中旬、平壤において開催した総会で、長い間引きずって来た神社参拝問題を解決し、皇国臣民としての伝道報国に邁進するようになったことは、朝鮮キリスト教会の画期的な転換と発展を意味するのみならず、実に朝鮮統治史上においても大きく寄与する事実であると言える。このような偉業をあらわすまでには、教会指導者達の絶え間ない努力と奮闘もあったが、平南の各警察署の関係職員達の涙ぐましい活動も決して忘却することのできない事実である。これに際して、平南警察部では、関係功劳者達を何らかの形で表彰すべくその方法を考慮中であつたが……

朱基徹「チュ・ギチョル」牧師の説教 「五つのわたしの祈願」から

1939.2.5

私は彼らの手によって何度目か逮捕され、この度は長い囚われの身となっていました。この山亭峴「サンジョンヒョン」の講壇に再び立つこととなりました。……

私は今まさに、死に直面しています。私の命を奪おうとする黒い手は、時々刻々と迫っています。死に直面した私は、『死の権勢に打ち勝たせてください』と祈らないわけにはいきません。……

イエスの御名によって死刑場に出ていくのは、キリスト者の最大の祝福であります。主のために十回、百回死ぬのはよい。しかし、主を捨てて百年、千年生きるという、それが一体何の長命でしょうか！ ああ！ 主よ！ この命を惜しんで主を辱めることがないようにしてください。このからだは潰れて粉となろうと、主の戒めを守らせてください。



讃頌歌543（旧） 저 높은 곳을 향하여 あの高い所に向かって

- 1 あの高いところに向かって 日ごとに進んでいきます。
わたしの意志と真心をつくして 日ごとにお祈りします。
（おりかえし）
わが主よ わたしの足をとらえて そこに立たせてください。
そこには光と愛が いつも満ちています。
- 4 険しく高いこの道を 戦いつつ進んでゆきます。
いま一度お祈りしますから わが主よ お導きください。
（おりかえし）



第Ⅲ卷 冒頭の資料（日本）

「教団と終戦」 教団新報

教団統理者は八月二八日付左の指令を全国各牧師、主任者に与えた。

「聖断一度下り、畏クモ詔書ノ渙発トナル。而シテ我が国民ノ進ムベキ道茲〔ここ〕ニ定マレリ。本教団ノ教師及ビ信徒ハコノ際聖旨ヲ奉戴シ国体護持ノ一念ニ徹シ、愈々信仰ニ励ミ、将来ノ国力再興ニ傾ケ、以テ聖慮ニ応エ奉ラザルベカラズ。

我等ハ先ヅ事茲ニ到リタルハ畢竟我等ノ匪躬〔ひきゅう〕ノ誠足ラズ報国ノ力乏シキニ因シリコトヲ深刻ニ反省懺悔シ、今後辿ルベキ茨棘〔しきょく〕ノ道ヲ忍苦精進以テ新日本ノ精神的基礎建設ニ貢献センコトヲ厳カニ誓フベシ。

.....

昭和二十年八月二十八日

教団統理者 富田満

「朝鮮基督教会機関誌 基督公報 刊行の辞」 1946.1.17

世界を覆っていた暗黒の幕はすでに破られた。……このような悲嘆の中に包まれた世界に、万有の主がもう一度声を発し、剣と槍は折られ、朝日が東天に昇って悪魔は闇の中に伏してしまった。

この間残忍な虐政下でひどい仕打ちを受けた朝鮮教会の満身創痍こそ、隠そうにも隠しようがなく……指導者たちは退けられ、多くの祭壇は汚され、すべての機関は絡まり合って機能を喪失してしまった。……そこには新たな生命的な指導力と新たな組織が要請されている。

朝鮮の教会は新しい指標に向かっている。それは「一つ」によって、である。……「基督教公報」はこの新しい指標に向かう朝鮮キリスト教の伝令使である。

金麟瑞(キムインソ)牧師

「日帝圧迫下に犯した罪を悔い改める」

『信仰生活』 1952.9・10

神社参拝の日に自分は逃亡し、もしかして家族が私の代りに引っ張られて行くようにさせたことは自分がこの身をもって神社参拝した以上に重罰を受けるべきものであることを何度も痛悔し、罪に服します。

また洞会で神宮の名を書いた紙箱を配付したとき、それをそのまま一度十銭を払って買ったことが、その時以来私の心に傷となっており、悔い改めます。



「韓国・朝鮮の基督教会に対して行った神社参拝強要についての罪の告白と謝罪」

……とりわけ、韓国・朝鮮に対する「明治」以来の侵略行為を肯定し、それに荷担しました。そして自らの立つべき信仰に立たず、隣国の主にある教会の信仰告白をふみにじり、神社参拝を強要した罪を、まず唯一の主なる神の前に懺悔いたします。

その結果、多大の犠牲と殉教を余儀なくされた韓国・朝鮮の基督教会に、心からお詫びいたします。わたしたちは自らの負うべき十字架を負うことを避け、み言葉の真理に基づいて大胆に語るべきことを語らず、隣人を自分のように愛さず、真に祈るべきことを祈らなかったことを覚えて赦しを乞い求めます。

1990年10月19日 日本基督教会 第40回大会 大会議長 高井孝夫

- 1945 日本敗戦、朝鮮解放
- 1950 朝鮮戦争勃発
- 1960 4.19学生革命 李承晩退陣
- 1961 軍事クーデター → 朴正熙政権
- 1965 日韓基本条約
- 1967 日本基督教団「戦責告白」
- 1976 3.1「民主救国宣言」
- 1979 朴正熙射殺 粛軍クーデター → 全斗煥政権
- 1980 5.18光州民主化運動 「金大中氏を殺すな！」
- 1987 6月民主化抗争 盧泰愚 6.29「民主化宣言」
- 1996 日本聖公会「戦争責任に関する宣言」

「夫は獄にある勤労者たちの友」 金玉蘭

『基督公報』 1974.3.16（長老教会機関紙）

天におられるわたしたちの父よ。〔夫は〕今は望まない不自由な監房で寒い暮らしを送っています。この方はいつも苦しみを受けている勤労者たちの痛みに自分の肉をえぐられて、労働者たちの受け取るわずかの報酬に涙を流し、勤労者たちのやりきれない思いを見過ごしにできず、貧しい身なりでおなかをすかせた人々を助け、保護し、踏みつけられ蔑視される人々を高く上げ、今も将来も希望のない人々に希望を与えるために、この方は一日も休むことなく朝早くから夜遅くまで勤労者たちとともに生きてきました。

父なる神よ。一日も早く夫とその友人たちに自由と喜びを与え、わたしたちすべてがうれしく出会う喜びをお与えください。

一九七四年（昭和四九）

→韓国問題キリスト者緊急会議（1974～1991）は長期にわたって『韓国通信』を発行。貴重な情報を提供しつづけた。日韓キリスト教の協力・連帯の一つの具体的な姿である。

KSCF「一九七四年キリスト教学生宣言」を発表

1/8 大統領緊急措置第1号・第2号発動 1/15 民主統一党最高委員・張俊河氏、白凡思想研究所長・白基玩氏が緊急措置違反で逮捕される 1/17 UIMの牧師連11人、緊急措置や維新体制を批判する声明を発表
2/1 非常普通軍法会議 張俊河・白基玩両氏に懲役15年、資格停止15年の判決 2/7 非常普通軍法会議 UIMの牧師ら6人に懲役10～15年、資格停止10～15年を宣告 2/26 韓国の女性団体、日本の経済侵略に抗議して、日本製品不買運動を呼びかける
3/14 韓国神学大学学生会宣言
4/3 「全国民主青年学生総連盟」が決起し、「民衆・民族・民主宣言」を発表。直ちに大統領緊急措置第4号発動される 4/9 金学道氏、朴政権に抗議して永樂教会で焼身自殺 4/25 KCIA、「民青学連」事件の捜査結果を発表。240余人を取り調べ、リーダー60人の名前を公表する
5/27 非常普通軍法会議検察部、日本人2人を含む「民青学連」事件のリーダーら54人を起訴。罪名は大統領緊急措置1号・4号違反、国家保安法違反、反共法違反、内乱予備陰謀、内乱扇動など
7/5 カトリック司教団、教書「聖年を迎えるに際して」で、朴政権による緊急措置体制を真っ向から批判 7/8 非常普通軍法会議「人民革命党」21人にに対し、7人に死刑、8人に無期懲役、6人に懲役20年、資格停止15年を求刑 7/9 非常普通軍法会議、「民青学連」32人にに対し、7人に死刑、7人に無期懲役、18人に懲役15～20年を求刑 7/13 非常普通軍法会議、「民青学連」32人に求刑通りの判決 7/16 前大統領・尹潽善氏、軍事法廷へ出廷。以後、

1/15 日本で「韓国問題キリスト者緊急会議」が発足

2/8 韓国キリスト者・学生より、日米の民主的・良心的人々へ地下声明が送られる
4/7 在日韓国人大会決議文 4/18 金榮作 ICU 助教授ら5人、スパイ容疑で逮捕される 4/18 「日本の対韓政策をただし、韓国民主化闘争に連帯する日本連絡会議（日韓連）結成 4/24 早川嘉春・太刀川正樹両氏、KCIAにより逮捕される
5/3 日本人キリスト者ら「ニューヨーク・タイムス」に韓国民主化闘争支持の全面広告掲載 5/7 韓国基督教教会女性連合会、日本での在日韓国人朴鍾碩君への就職差別裁判闘争に呼応し、「日立製品不買運動実行委員会」を結成する 5/12 タイの全国学生センターら民主的諸団体が連名で、朴大統領の人権抑圧政策に抗議する書簡を発表
6/19 横浜地裁で、朴鍾碩君に対する「日立就職差別裁判」の判決が出され、朴君の全面勝訴となる
7/10 「金芝河らを助ける会」が「うったえ」を発表 7/12 非常普通軍法会議、早川・太刀川両氏に懲役20年を求刑 7/15 非常普通軍法会議、早川・太刀川両氏に求刑通りの判決

自宅軟禁となる 7/20 韓国国防省、死刑判決を受けた「民青学連」7人の内、金芝河氏ら5人を無期懲役に減刑 7/23 池学淳司教、軍法会議への召喚を拒否する「良心宣言」を発表 7/24 警備局「スパイ」事件、ソウル刑事地裁で5人に死刑、3人に無期懲役、24人に懲役1～10年の判決
8/9 非常普通軍法会議、尹潽善前大統領、池学淳司教、朴炯圭牧師、金東吉延世大教授4人に懲役・資格停止ともに15年、金燦国延世大神学部長に同10年を求刑 8/12 非常普通軍法会議、緊急措置第4号違反・内乱扇動などの罪で、尹潽善前大統領に懲役3年・執行猶予5年、池学淳司教、朴炯圭牧師、金東吉延世大教授、金燦国延世大神学部長に求刑通りの判決を言い渡す 8/15 朴大統領狙撃され、妻の陸英修死亡。狙撃犯は在日韓国人の文世光 8/23 朴大統領、緊急措置第1号と第4号を解除 8/27 新民主党・金泳三新総裁、憲法改正による民主主義体制の回復、大統領緊急措置による全拘束者の釈放要求などを発表
9/6 朴大統領狙撃事件をきっかけとして反日デモが激しくなり、約250人がソウルの日本大使館に乱入 9/11 金寿煥枢機卿らカトリック信徒約1500人が「時局のための祈禱会」を開催、池司教ら全拘束者の釈放を求める決議文を採択 9/22 新日キリスト教徒約1000人、「祖国と正義と民主回復のための連合祈禱会」を開催、民主回復を求める「われらの宣言」を採択 9/23 梨花女子大学生会「8000の梨花人へ」を発表 9/26 カトリック教徒約2000人、「殉教者を賛美し、苦痛を受けている者のための祈禱会」を開催 9/30 大韓イエス教長老会、第59回総会において「時局宣言文」を発表
10/9 「天主教合同聖年大会」が約二万人のカトリック信徒を集めて開かれ、拘束者の釈放、三権分立の確立、維新

決 7/19 朴政権の弾圧に抗議する世界同時一斉行動が起こる 7/30 米上院外交委員会の二つの小委員会合同で、「韓国における人権問題」公聴会開催。アムネスティ米国支部、韓国へ派遣したウィリアム・バトラー氏の報告を発表
8/4 日韓キリスト者緊急集会開かれる 8/5 米下院、韓国問題公聴会開催 8/13 パチカン当局、池学淳司教らの重刑判決に深い憂慮を表明 8/29 第2回世界宗教者平和会議「韓国の人権に関する声明」を発表 8/30 CCA協議会「アジアにおける人権について」を発表

9/19 椎名悦三郎・日本政府特使、大統領狙撃事件謝罪のため訪韓 CCA代表団、韓国を訪問。人権問題を調査

「民主救国宣言」 1976.3.1 (12名連署)

本日で三・一節五七周年を迎え、われわれは、一九一九年三月一日、全世界に響きわたったこの民族の喊声、自主独立を絶叫したあの雄叫びが今もありありと響きわたってくる。今日の状況をこのまま座視することは、救国先烈たちの血を無駄にするような罪意識にとらわれ、われわれの志を結集して「民主救国宣言」を国内外に宣布するものである。

- I この国は民主主義の基盤の上に立たねばならない
- II 経済立国の構想と姿勢は根本的に再検討されるべきである
- III 「民族統一」は今日、わが同胞に負わされた至上の課題である

※これに対し日本基督教団総会は民主化闘争支援声明 (1976.11.18)

【ビラ】 アピール・全斗煥の光州殺戮作戦

『韓国通信』 1980.5.20（韓国問題キリスト者緊急会議）

ああ！ 民族史の大悲劇よ！

五月一七日の夜中を期して全斗煥とその一派は、既存の非常戒厳令をさらに強化し、自分の意にそぐわない全ての政治家、民衆、市民たちを逮捕・拘束することによって、わが民衆が期待していた民主主義に対するかすかな希望までもを抹殺してしまった。

これに憤激した光州の全南大学、朝鮮大学……民主市民たちの平和的デモに対して、三万余名の戦闘警察を動員し、……ペーパーフォグ（こしょう弾）を撃ちながら包囲網を縮め、退路を断ち、ソウルから急派された三千余名の空挺部隊たちは、銃剣をふりかざして、狂犬のようにあたかもカボチャを刺すように、手あたりしだい刺すことによって血が河のごとく流れる死体を、軍のトラックに投げ込んでいった。

ニムのための行進曲

사랑도 명예도 이름도 남김 없이
한평생 나가자던 뜨거운 맹세
동지는 간데없고 깃발만 나부껴
새 날이 올 때까지 흔들리지 말자
세월은 흘러가도 산천은 안다

- 깨어나서 외치는 뜨거운 함성
- 앞서서 나가니 산 자여 따르라
- 앞서서 나가니 산 자여 따르라

임을 위한 행진곡

愛も名誉も名前も残さずに
一生涯を進もうと言った熱い誓い
同志は跡形なく 旗だけがはためく
新しい日が来るまで 揺るがずにいよう
歲月は流れて行っても 山河は知っている
目覚めて叫ぶ熱い喊声

先に行くから 生きている者は続け
先に行くから 生きている者は続け

ニムのための行進曲 임 (님) 을 위한 행진곡

아이엠피터tv

(5) 日本聖公会

日本聖公会の
戦争責任宣言
1996.5
総会決議

1 日本聖公会の戦争責任に関する宣言

(1) 日本聖公会は、戦後五〇年を経た今、戦前、戦中に日本国家による植民地支配と侵略戦争を支持・黙認した責任を認め、その罪を告白します。

一九四五年、日本聖公会は日本によるアジア太平洋諸地域に対する侵略と植民地支配の終焉という歴史的転機に立ちました。その年の臨時総会告示で、佐々木鎮次主教は戦時下の教会の反省を述べ、「国策への迎合」「教会の使命の忘却」を指摘しました。このとき、総会も主教会も教区も各個教会も預言者の働きをなしえなかったことを深く反省し、日本が侵略・支配した隣人へ心から謝罪し、真実に和解の関係を公会として求めるべきでありました。日本聖公会は、設立以来、福音に反する天皇制国家の国体思想や軍国主義に対し、妥協をつづけ、強く抵抗し拒むことができた

せんでした。日本聖公会が英国、米国、カナダなどの聖公会と繋がりを持つゆえに、官憲の圧迫を受け、信仰の戦いを経験した牧師、信徒もいましたが、その苦汁の経験にもかかわらず、わたしたちの教会は、抑圧され苦しむ人々と共に立つ姿勢を持ちえませんでした。また、国際的な交わりを持つ教会であるにもかかわらず、侵略戦争による加害者としての国家の姿に目を開くことができませんでした。むしろ「支那事変特別祈願式」「大東亜戦争特別祈禱」などを用い、他民族支配や戦争協力をキリスト教の名において肯定し、教勢の拡張や体制の維持のみをめざす閉ざされた教会にとどまり、主の福音が示す「地の塩」としての役割を果たすことができませんでした。

(2) 日本聖公会は、敗戦後、すみやかにこの過ちを認めなかったこと、また戦後の五〇年も自らの責任を自覚せず、和解と補償のため積極的に働くことなく今日にいたったことを、神の前に告白し、アジア・太平洋の人々に謝罪します。

戦後、日本聖公会は一九四七年第三二総会において、一九三八年版の祈禱書をそのまま正本として採用しました。その祈禱書には、天皇の支配を神の御旨とみなす「天皇のため」「紀元節祈禱」などの祈禱文がありました。さらに一九五九年祈禱書改正まで、公会問答において「隣に対してなすべきことと如何」の答えとして「……天皇陛下とその有司(つかさ)に従い……」と教え、聖餐式の中では「すべて主権を持つもの殊にわが今上天皇を祝し」と司祭が祈りました。このように戦後もなお、戦争責任においてももともと問われるべき天皇やその国家体制を肯定する祈禱書を用い続け、自らの姿勢を自覚的に正すことを怠っていました。

2 感謝と課題

新しい価値で新しい地平を切り開いていかなければ

金根祥パウロ司祭

はじめに

皇国臣民化政策の結果、引き起こされた沖縄戦の住民虐殺や強制集団自決、さらに戦後における米軍基地の脅威などの沖縄の経験は、沖縄教区を通して語られつづけ、一九七二年の日本聖公会への移管に向けて「歴史と現状を理解してほしい」との沖縄教区からの問いかけがありました。しかし、その後も日本聖公会として応答することを怠ってきたことを、反省しなければなりません。

(3) 日本聖公会は、差別体質を戦後も克服できていないことを告白します。神の民として正義を行うことへと召されていることを自覚し、平和の器として、世界の分裂と痛み、叫びと苦しみの声を聴き取ることのできる教会へと変えられることを祈り求めます。

以上わたしたちの悔い改めの徴として次のことをすすめています。

(1) 日本聖公会の戦争責任の告白を全教会が共有すること。

(2) 日本が侵略した諸国の教会に対し、日本聖公会としての謝罪の意志を伝えること。

(3) 歴史的事実の認識と福音理解を問い直し深めるための取り組みを、各教区・教会の中で継続してすすめること。

(一九九六年第四九定期総会、決議第三四号)

井田神父様の説教内容は、カインが殺したアベルの血から韓国民衆の「ハン」を読み解くことができ、そして、アベルを殺したカインの痛みがご自身をはじめとする日本人にあるのだというものであったと思います。

数回にわたり日本の友人たちにお話して来たように、私は、反日と反共を耳にしたことができるほど聞きながら学生時代を過ごしてきました。ですから、大して期待しないで臨んだ日本聖公会との交流であったと思います。しかしまさにそこにおいて、カインとアベルの悲しみと痛みに関する日本人司祭の苦悩を聞くことができたのです。そのときから、日本という国よりも日本人キリスト者、日本聖公会の人々に目を注ぐようになったのです。

一方わたしたちは、あまりに過去に縛られています。私の同胞

最後に収められた資料

「'98民族の和解・平和・統一のための祈願礼拝」

(超教派) 1998.8.15 京東教会

教友の皆さん、神はヘブライ人がエジプトの地で苦勞し抑圧され、苦しみ叫んだとき、彼らを憐れんで救われたように、わたしたちの民族が日本の植民地統治下で勞し苦しみ叫んだとき、わたしたちの民族を憐れみ救ってくださいました。

この感謝の日に、主は再びわたしたちにこの尊い場所を設けてくださいました。

富坂キリスト教センター編
『日韓キリスト教関係史資料 Ⅲ
1945－2010』

(新教出版社 2020年11月30日発行)

定価 本体15,000円＋税

価格(16,000円 税抜き・送料込み)で、
当センターからお送りできます。

◇お問い合わせ先；

富坂キリスト教センター

TEL:03-3812-3852 FAX:03-3817-7255

okada@ceam.asia (岡田)